

ダニエルの書 - 第百八十六番

パニウムの約束：最後の封印と真夜中の叫びの啓示

Jeff Pippenger

2024-04-16

パニウム、すなわちカイサリア・フィリピにおいて——そこはダニエル書11章13節から15節に当たり、共和主義の角とプロテスタントの角が「七つに属する八番目」であるという謎を成就する歴史であり、神の封印が十四万四千人に永遠に刻印され、また真夜中の叫びのメッセージが到来するという歴史でもある——キリストは終末の民に約束を与えられた。

また、わたしはあなたに言う。あなたはペテロである。この岩の上に、わたしはわたしの教会を建てよう。黄泉の門もそれに打ち勝つことはない。わたしはあなたに天の御国の鍵を与える。地上であなたが何でもつなぐなら、それは天でもつながれ、地上であなたが何でも解くなら、それは天でも解かれる。マタイ16:18、19。

2001年9月11日、ニューヨーク市の巨大な建造物が打ち倒されたときに始まり、間もなく到来する日曜法で終わる封印の期間は、アルファでありオメガである方によって定められた。その期間のまさに最後の部分は、まさに最初の部分を繰り返す。2001年9月11日に、主はご自分の民を昔からの道へと立ち返らせ、そこで彼らは他の真理とともに「七つの時」を見いだした。これはヨシヤ王の時代にそれが見いだされたのと同様である。そのとき後の雨が降り始め、二種類の礼拝者を分かつ試練の過程が始まった。

ハバクク書二章の成就として、二枚の聖なる図表が発見され、それはその歴史的時期の象徴となった。同様に重要なのは、ハバクク書二章の「論争」が始まったことである。すなわち、後の雨の方法論である「行に行を重ねる」という手法と、1863年の反逆に端を発しアドベンティズムが徐々に採用してきた背教的プロテスタント主義の方法論との間でのものであった。

イエスは、終末の民に「御国の鍵」を与えると約束されたが、そうすることによって、真夜中の叫びと大いなる叫びのメッセージを識別し、確立し、宣べ伝えるために必要な預言の鍵を含む、正しい聖書的な方法論を指しておられる。

神と交わる者は、義の太陽の光のうちを歩む。彼らは、神の前で自分の道を墮落させて、贖い主の名を汚すことはない。天の光が彼らを照らす。地上の歴史の終わりに近づくにつれ、キリストおよび彼に関する預言についての彼らの知識は大いに増し加わる。彼らは神の目には無限の価値がある。なぜなら彼らは御子と一致しているからである。彼らにとって神の言葉は比類なく美しく、麗しい。彼らはその重要性を悟る。真理が彼らに開かれる。受肉の教理は柔らかな光彩を帯びる。聖書こそが、あらゆる神秘を解き明かし、あらゆる困難を解決する鍵であることを彼らは理解する。光を受けることも光のうちを歩むことも望まなかった者たちは、敬虔の奥義を理解することができない。しかし、十字架を負ってイエスに従うことをためらわなかった者たちは、神の光のうちに光を見るであろう。『サザン・ウォッチマン』1905年4月4日。

ペテロに象徴される者たち、すなわち十四万四千人は、2001年9月11日に到来し、2023年7月以来いま繰り返されているラオデキアのメッセージを受け入れる者たちである。1856年に到来したラオデキアのメッセージとは、「七つの時」に関する知識の増加であり、キリストが死んだ骨を一つに集め、そののちそれらに命を与えると、彼らは第三天使のラオデキア的運動から、十四万四千人のフィラデルフィア的運動へと移行する。その移行はキリストの御言葉によってもたらされる。彼らはその御言葉によって聖別され、その御言葉は「真理」であり、御言葉を開く「鍵」でもある。

フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っておられ、開けば誰も閉じることができず、閉じれば誰も開くことができない方が、こう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に開かれた門を置いた。誰もそれを閉じることにはできない。あなたはわずかな力しかないが、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。ヨハネの黙示録 3:7-8。

「line upon line」の方法論は、「門」での戦いにおいてキリストがご自分の終わりの時代の民に約束した鍵である。「門」とは教会である。

ヤコブは眠りから目を覚まして言った。「まことに主がこの所におられる。私はそれを知らなかった。」彼は恐れて言った。「なんと恐るべき所だろう。ここは神の家にほかならず、ここは天の門だ。」創世記28章16、17節。

城門での戦いは、真理と誤りの間で起こる宗教的な戦いを表しており、ギリシャの宗教の誤謬は地獄の門であり、背教的なラオデキア的アドベンチズムの宗教もまた門である。ラオデキア的アドベンチズムの門は、ハバククの論争が成就する場所を表している。

その日、万軍の主は、残りの民にとって栄光の冠、美しさの宝冠となり、また裁きの座に座る者には裁きの霊となり、戦いを門へと押し返す者たちには力となる。しかし彼らもまた、ぶどう酒のために迷い、強い酒のために道を外れた。祭司も預言者も強い酒のゆえに迷い、ぶどう酒に吞まれ、強い酒のために道を外れた。彼らは幻に誤り、裁きにつまずく。すべての食卓は吐瀉物と汚れで満ち、清いところがない。だれに知識を教え、だれに教えを悟らせるのか。乳を離れ、乳房から引き離された者たちにか。

戒めに戒め、戒めに戒め、定めに定め、定めに定め。ここにも少し、そこにも少し。彼はども唇と異なることばでこの民に語られる。彼は彼らに言われた。「これこそ、疲れた者を休ませる安息であり、これこそ、憩いである。」しかし彼らは聞こうとしなかった。それゆえ主のことばは彼らにとって、「戒めに戒め、戒めに戒め、定めに定め、定めに定め。ここにも少し、そこにも少し」となり、彼らが行って後ろに倒れ、砕かれ、わなにかかって捕らえられるためであった。

それゆえ、エルサレムにいるこの民を治める、嘲る者たちよ、主のことばを聞け。
イザヤ書 28:5-14

御国の鍵は聖書の言葉であり、それは御言葉によって神の終末の民に与えられている。

御言葉のうちには、貴重な鉱脈のように、表面の下に隠された真理がある。隠された宝は、金や銀を求める鉱夫が探すように、探し求める中で見いだされる。神の御言葉

の真理の証拠は、その御言葉自身のうちにある。聖書は聖書を解き明かす鍵である。神の御言葉の真理の深い意味は、聖霊によって私たちの心に開かれる。

聖書は、私たちの学校の生徒たちにとって大いなる教科書である。聖書は、アダムの子らに関する神の全き御心を教える。これは人生の規範であり、来るべきいのちのために私たちが形づくらなければならない品性を教える。聖書を理解するのに、伝統のほの暗い光は必要ない。あたかも、真昼の太陽がその栄光を増すために地上のかすかな松明の光を必要とするとでも言うようなものだ。人を誤りから救うのに、司祭や牧師の言葉は必要ではない。神託に問う者は光を得る。聖書の中では、あらゆる務めが明らかにされている。与えられているすべての教訓はわかりやすい。すべての教訓が御父と御子を私たちに示す。みことばは、すべての人を救いに至るほどに賢くすることができる。みことばのうちには、救いの原理が明白に示されている。聖書を調べよ。聖書は、魂に語りかける神の御声であるからだ。『証言』第8巻、157頁。

キリストが終末の教会に授けた鍵は、ペテロに授けられたときと同じ力を持っている。

ペテロは教会の信仰の土台となる真理を言い表し、イエスは今、信じる者たち全体の代表として彼をお認めになった。イエスは言われた、「わたしはあなたに天の御国の鍵を与える。あなたが地上で縛るものは何でも天においても縛られ、あなたが地上で解くものは何でも天においても解かれる。」

「『天の御国の鍵』はキリストの言葉である。聖書の御言葉はすべてキリストのものであり、そこに含まれている。これらの言葉には、天を開き、また閉じる力がある。それらは、人が受け入れられるか退けられるかの条件を示す。こうして、神の言葉を宣べ伝える者の働きは、命に至らせる命の香りとも、死に至らせる死の香りともなる。彼らに委ねられた使命は、永遠にかかわる結果を伴う重いものである。」 The Desire of Ages, 413.

彼の言葉を通して現れる力は、人の手に渡されたとき、彼の言葉に示された原則に基づいている。おそらく最も単純で、そしておそらく最も深遠なのは、真理は二人の証言によって確立されるということである。

教会に生じていたもう一つの重大な悪は、兄弟たちが互いに訴え合うことだった。信者の間の問題を解決するための十分な備えはすでになされていた。このような事柄をどのように扱うべきかについて、キリストご自身が明確な指示を与えておられた。救い主はこう勧めておられた。「もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけで彼にその過ちを告げなさい。もし彼があなたの言うことを聞かなら、あなたは兄弟を得たことになる。もし彼が聞こうとしないなら、さらに一人か二人を一緒に連れて行きなさい。二人または三人の証人の口によって、すべての言葉が確認されるためである。もしそれでも彼が彼らの言うことを聞き入れないなら、教会にそれを告げなさい。もし教会の言うことさえ聞こうとしないなら、彼を異邦人や取税人のように扱いなさい。まことにあなたがたに言う。あなたがたが地上でつなぐものは天においてもつなぐれ、地上で解くものは天においても解かれるであろう。」 マタイ18:15-18. 使徒行伝、304.

真夜中の叫びにおいて十四万四千人が印を受ける時期には、少なくとも三つの地理的な証人がある。真夜中の叫びの時には油を手に入れるには遅すぎるという事実を念頭に置く

と、エクセターのキャンプ集会の地理的な証言が、神の終末の民が印を受ける時点を示す一つの例証を与えているのを見だし、その真理がフィリポ・カイサリアの地理によって表されていること、さらにダニエル書十一章十三節から十五節にあるパニウムの戦いの証言によっても表されていることを見だす。これら三つの証人を地理的なものと呼ぶのは少し無理があるかもしれないが、エクセターやフィリポ・カイサリアにおいて地理が確かに舞台設定の一部を成しているので、その語を用いている。イエスは、終わりの日に十四万四千人が身を置くことになる預言的な地理の中にペテロを位置づけ、それから命じる。

「また、わたしはあなたに天の御国の鍵を与える。あなたが地上でつなぐものは天においてもつながれる。あなたが地上で解くものは天においても解かれる。」それからイエスは弟子たちに、自分がキリストであることをだれにも言ってはならないと命じた。その時からイエスは、弟子たちに、自分はエルサレムに行かなければならず、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを示し始めた。するとペテロはイエスを脇へ連れて行き、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずはありません」といさめ始めた。しかしイエスは振り向いてペテロに言われた。「下がれ、サタン。あなたはわたしの妨げだ。あなたは神のことを思わず、人のことを思っているからだ。」マタイによる福音書 16:19-23.

「エクセター」という語は、イングランドのデヴォン州にある都市の名称である。その語源は古英語にさかのぼり、当時は「Exanceaster」または「Execestre」と呼ばれていた。この名は、（その都市がその岸辺に位置する）エクス川を指す古英語の「Exe」と、「ローマの砦」または「城壁都市」を意味する「ceaster」に由来すると考えられている。したがって、「Exeter」は「エクス川のほとりの砦」あるいは「エクス川沿いの城壁都市」を意味する。ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」の到来と成就に関連する地理は、聖霊の注ぎを表す水のある場所と、神がそのメッセージを世界に宣べ伝えるための軍勢を起こしておられた地点を指し示している。ホワイト夫人は、そのメッセージが「津波」のように広がったと私たちに教えている。津波は単なる川の水ではなく、圧倒的な力を帯びた水である。

ミラー派の歴史は十人の乙女のたとえの成就であり、封印の時期の終結へと十四万四千人が導かれるとき、彼らは封印の時期の初めに特定された道しるべと、エクセターのキャンプ集会の歴史とをも繰り返すだろう。天使が、食べなければならない試しのメッセージを携えて降りてくる。そのメッセージは土台へと導き、二つの階級にレビ記26章の「七つの時」を突きつけるだろう。それには、神的な象徴が鳩のかたちで下ったときにイエスがキリストとして油注がれたことを受け入れるものとしてペテロによって示された、イエス・キリストの啓示が含まれ、これは2001年9月11日を象徴している。またそれには、イエスが神の御子という神的なお方であるという理解、およびイエスとその神的存在において墮落した人類の肉をお取りになったことによって、人の子でもあられるという理解が含まれる。

これらの真理は、2001年9月11日以後にそうであったように、礼拝者を二種類に分かつことになるだろう。二つの種類はエクセターのキャンプ集会で示された。というのも、その

集会には、サムエル・スノーを通して提示された「真夜中の叫び」のメッセージを退けたウォータータウンの一団が天幕を張っていたからである。彼らは偽の集会を開き、その騒々しさと感情的な高ぶりがあまりに激しかったため、スノーの集会の指導者たちが彼らのもとへ行き、静かにするよう伝えた。そのキャンプ集会では二つの種類が現れ、どちらも自分たちは水に関係があると称していたが、一方は偽物で、油のない愚か者たちを表していた。エクセターの天幕にいたその一団は、都市であり同時に要塞でもある軍隊であった。というのも、彼らは「真夜中の叫び」のメッセージによって力ある軍隊として起こされる、エゼキエルの死んで干からびた骨を型どっていたからである。

その二つの類が明らかにされているこの場面で、ペテロは両方を代表した。イエスがキリストであり神の子であるとする彼の告白は、聖霊の啓示によってもたらされたものだった。というのも、キリストが彼にはっきりとこう言われたからである。「それをあなたに示したのは血肉ではなく、天におられるわたしの父である。」それから、イエスが弟子たちに十字架のことを知らせたとき、その時は聖霊の導きに欠けていたペテロは、イエスをわきへお連れして、いさめはじめて言った。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いてペテロに言われた。「サタンよ、引き下がれ。あなたはわたしのつまずきだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っているからだ。」

ペテロの感情の爆発は、サムエル・スノーが「真夜中の叫び」のメッセージを語っていたとき、ウォータータウンの天幕で起こっていた感情的な礼拝と一致していた。そのレベルにおいてペテロは、十四万四千人に加えられる候補者たちを代表している。その候補者たちは油を持つ一つのグループを表しており、その油とは聖霊であり、メッセージであり、品性でもある。これに対し、もう一方のグループは油を欠いている。カイサリア・ピリピの場面で、キリストは「自分はエルサレムに上り、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならない」と明らかにし始めた。

それらの出来事が実際に十字架で成就したときの弟子たちの失望は、ホワイト夫人が、1844年10月22日の失望と、ファラオの軍勢が迫り行く手に海が広がる中で紅海を渡る際のヘブライ人の失望を例証するために用いる歴史である。これらすべての証言は、間もなく到来する日曜法を指し示しており、さらにダニエル書11章13～15節の啓示は、その日曜法へと至る出来事についての証言を与えている。そうすることで、それらはまた「終末に関するダニエルの預言の一部分」をも表している。

次の記事でこの研究を続けます。

型と反型の綿密な研究から、キリストの十字架刑は、イスラエルに与えられた年ごとの祭儀の巡りの中で過越の小羊が屠られるまさにその日に行われた、ということが見いだされた。そうであるなら、(第七の月の十日に当たる)贖罪日において型によって示された聖所の清めも、やはりその型が祝われる年のまさにその日に起こるのではないか。(The Great Controversy, 399 参照) モーセの教えに従った正しい時の数え方によれば、これは10月22日となる。1844年8月初め、ニューハンプシャー州エクセターでのキャンプ集会でこの見解が提唱され、2300日の預言の成就の日付として受け入れられた。マタイ25章1-13節の十人の乙女のたとえは特別な意味を帯びるようになっ

た-花婿の遅れ、婚礼を待つ者たちの待機とまどろみ、真夜中の叫び、戸が閉められること、等々。キリストが10月22日に来られるというメッセージは「真夜中の叫び」として知られるようになった。エレン・ホワイトは、「『真夜中の叫び』は、何千人もの信者によって告げ知らせられた」と記した。彼女はさらに次のように付け加えた：

「津波のように、その[第七の月]運動は全土を席卷した。都市から都市へ、村から村へ、そして人里離れた地方にまで広がり、ついに待ち望んでいた神の民は完全に奮い立たされた。-『大いなる論争』、400」

メッセージの広まりの迅速さは、L. E. Froomが引用している著者たちによって描写されている：

ベイツは、エクセターのメッセージが「まるで風の翼に乗って飛んだ」と記録している。男女は本や文書の束を携え、鉄道や船、駅馬車や馬で駆け巡り、それらを「秋の木の葉のように惜しみなく」配布した。ホワイトは言った。「我々の前にある務めは、その広大な野の隅々まで飛び、警鐘を鳴らし、眠っている者たちを目覚めさせることだった。」そしてウェルカムは、その運動がダムから放たれた水のようにあふれ出たと付け加えている。熟した穀物の畑は刈り取られないままにされ、育ちきったジャガイモも土中に掘り起こされずに残された。主の来臨は近いのだ。もはやこのような地上的な事柄に費やす時間はなかった。-The Prophetic Faith of Our Fathers, Vol. IV, p. 816.

この運動の目撃者であり参加者として、エレン・ホワイトは、加速度的に進展する働きの特質を描写した：

「信者たちは、自らの疑いと当惑が取り去られ、希望と勇気が彼らの心を鼓舞するのを見た。この働きは、神の御言葉と御霊の抑制する影響を欠いた人間的な興奮のもとで常に現れるあの極端さからは自由であった……。それは、どの時代の神の働きにも見られる特質を帯びていた。有頂天の喜びはほとんどなく、むしろ心の深い探求、罪の告白、そして世を捨てることがあった。主にお会いするための備えこそが、苦悩する魂の重荷であった……」

「使徒たちの時代以来のあらゆる偉大な宗教運動の中で、1844年の秋のそれほど人間的な不完全さやサタンの策略から自由であったものはない。多くの歳月が過ぎた今も[1888年]、その運動に加わり、真理の土台の上に堅く立ち続けてきたすべての人々は、その祝福された働きの聖なる感化をなお感じ、それが神から出たものであったことを証している。-同前、400、401。」

全土に及ぶ働きが起こり、数千人を再臨信仰の交わりへと引き寄せている証拠があり、さらに各教会からおよそ二百人の牧師が一致してそのメッセージを広めていたにもかかわらず、[参照：C. M. Maxwell, Tell it to the world, pp. 19, 20.] プロテスタント諸教会は全体としてこれを退け、キリストが間もなく来られるという信仰が広まるのを食い止めるため、使いうる限りのあらゆる手段を講じた。教会の礼拝でイエスの間近い来臨への希望に言及することを、敢えてする者は一人もいなかった。しかし、その出来事を待ち望んでいた者たちにとっては、事情はまったく異なっていた。

エレン・ホワイトは、それがどのようなものだったかを語った：

「私には、どの瞬間も尊く、この上なく重要に思えた。私たちは永遠に関わる働きをしており、不注意で無関心な人々は最大の危険にさらされていると感じた。私の信仰は曇りなく、イエスの尊い約束を自分自身のものとして受け取った……」

心を入念に探り、へりくだって告白しながら、私たちは祈りをもって待望の時に至った。毎朝、神の御前で自分たちの歩みが正しいという確かな証しを得ることこそが第一の務めだと感じた。聖さにおいて前進していなければ、必ず後退するのだと悟った。互いへの関心は増し、私たちは互いに、また互いのために多く祈った。

「私たちは果樹園や木立に集まり、神と交わり、神に嘆願をささげた。自然の御業に囲まれているとき、私たちはその御臨在をいっそうはっきりと感じた。救いの喜びは、私たちにとって食べ物や飲み物よりも必要であった。もし心が雲に覆われたなら、主に受け入れられているという確信によってそれが一掃されるまで、私たちは休むことも眠ることもあえてしなかった。- 『ジェームズ・ホワイトとエレン・G・ホワイトの生涯のスケッチ』（1880年）、188、189。」アーサー・ホワイト『エレン・ホワイト伝』第1巻、51、52。